

「バーの扉」(ファンタジー・バージョン) ——旧友との再会・港区(後編)・江戸・帝都編——

札幌市医師会
華岡青洲記念病院

はなわか けいいち
華岡 慶一

前編で述べた教祖の手口(洗脳をマネタイズする手法)は、バブル崩壊時に「Wall Street / SB… / DS」が(当時はナイーブな日本に対して)仕掛けた「裁定取引」(Arbitrage)によるオプション攻撃を機能させる手口(刷り込み)と同じ構造だ——Yはそれをファンドマネージャーとして予言し(事前に書いた)、渦中でも、運用はベンチマークを上回った。相場の世界では、無知と思い込みの対価は「損失」だ。Yは、「いかなる利益付け替えも倫理的に許せない」(それが嫌で商社や信託をやめた)タイプだ。Yは——自身の正義を求めて——転職(闘争/逃走)を繰り返し、決して自分のこだわりと妥協しなかった。

教祖の説教に辟易として、その肩越しに——若女将に符丁めかして——「L'addition, s'il vous plaît!」と言ったら、すかさず「Oui monsieur!」と返ってきた(さすが『龍土軒』発祥の地!)。「やれやれ、なんとか無事に教祖を置き去りにできた」とその時は思った。呼んだタクシーに乗り込み、星条旗通りからテレ朝通りに出て、「筈町のバー」を目指した。半地下の先に「バーの扉」があった。扉の向こうは「ファンタジー・ワンダーランド」だ。私はジンベース、Yはシングルモルトで分岐世界の未経験ゾーン(あったかもしれない別の可能性)へ旅した。Yは、相変わらず「キレッキレ」で、アイロニーの効いたレトリック(昔日よりは都会的婉曲の香りを感じたが)は色褪せてなかった。彼の「居心地・倫理観」へのこだわり(転職も辞さない)と未来志向(彼は「過去に意識的に冷淡」と表現した)にまさに再会した。一方Yは、最近の拙文を評して「こんなに過去と言葉と思想にこだわる人だったとは意外」と表現した。私も彼と同様に未来志向だったが、時間の概念が違う(変わった)のだ。昔は、演繹的に因果を(未来を)追っていた。まさに「カーテシアン」であった。今の私は、時間は未来から過去へ流れると考える。日本でも、江戸時代は未来原因説だった。維新後に西洋から過去原因説(原罪/啓蒙思想/ヘーゲル史観)がもたらされた(だから歴史捏造に熱心なのだ)。私は、目標設定(実現したい未来)が重要と考える。その未来に近づくために現在の行動を決めることで、同時に過去が変わる(確定する)のだ。西洋とは別の意味で過去は書き換え可能ということだ。私は、Yが言う「否定的な過去」(サンクコスト)は、承認欲求の奴隷/リスクを取れない人が「酸っぱい葡萄」と称する「否定的な未来」(sinkable cost)と同義(放棄する点で)と考える。彼らが手にできない「未来」への入口は、昔のあの「扉」につながっている。

程よく酔いが回ったところで、「墓地下のバー」を目指して外苑西通りを遡上した。地表には雨が

降り注いでいた。「地下扉」の先ではCIAらしき二人のアメリカ人が飲んでいて——目と鼻の先にはCIAの日本出入口がある……。「霞町のバー」でのCIAとの会話中、突然込み上げた心窩部からの突き上げるような排泄の衝動で店の奥の「扉」を開けた。激しく嘔吐して胃、食道、全身の違和感をすべて水路に吐き出すと嘘のように静寂が訪れた。どうやらそこで意識を失ったようだ。……気分は悪くない。頭もハッキリしている。目の前の「扉」を開けるとそこはカラオケバーだった。CIAの一人が、「Honesty!」を熱唱していた。「霞町」の底から筈川を下り、天現寺で渋谷川を遡上し、恵比須(麻布区)の地下へ通底したようだ。地表(意識/象徴界)と地下水脈(潜在意識/想像界)を、時空を超えて往来したのだ(墓地下/聯隊裏では重装備の歩三を見た……)。

葦茂の湿地帯だった江戸は、治水の都となり——それが庶民の欲望というエネルギーを吸い上げながら超コード化(徳川幕府)して——膨張した。東京は——近代資本主義による脱コード化(クラインの壺のメタファー)を進め——さらに巨大化した(ドゥルーズ/浅田)。そこに、多くの物語(怪談話)が誕生して語られた。

地方で食い詰めた無宿人には——目指した江戸の入口(鈴ヶ森・小塚原)で、晒し首を一瞥しながら——干からびて、ここに帰って来る未来(出口での変わり果てた自分)が見えていたのだ。将門の怨念は首とともに江戸に飛来したが、庶民の情念は骸(胴体)ごと地表から水脈をへて江戸の地下に染み入った。

「身投げ」「心中」「殺生」。骸と、排泄された汗・涙・嘔吐は——欲望・怒り・憎悪・嫉妬・悲哀・絶望は——水中に放り込まれ、入り混じり自壊し、地下水脈でヘドロの蠢きになっている。

鶴屋南北は、化政期の武家社会の建前/欺瞞を、『忠臣蔵』と『四谷怪談』の同時・交互上演で巧妙に演出したが——現代の庶民の鬱憤ばらし・「怪談話(噺)」はバーで語られる。伊右衛門(生・欲)は、お岩(愛・怨)を戸板で面影橋から神田川へ流した。骸は、江戸を東西に縦断しながら遡上して砂村隠亡堀へ辿り着く。江戸落語で談志は、『黄金餅』の噺の枕で「道中言い立て」を「今なら首都高で、『入谷』から『天現寺』へ南北に一気」と茶化した。地表(象徴界)は変貌しても(厄災⇄復興)、地下水脈(想像界)は、暗渠となっても変わらず蠢く。噺の分岐世界では、腑に落ちた黄金と分たれた坊主・西念の骸と煩惱を湛えた桶は江戸前に浮かぶ(広重『深川洲崎十萬坪』)。「この世での役目を終えて 洲崎沖」……根津(遊廓)で藍染川へ放たれ、小名木川から大横川をへて遊女と共に……。

結局、初夏の日の出までファンタジーを楽しんだ。Yは、夕刻まで熟睡したようだ。翌日届いたメールには、次のような一文が添えられていた。「東洋経済オンラインに書いていた昨日のレース予想が的中した。数年に一度の万馬券が寝過ぎて『逆白昼夢』となった」。
……現実と夢幻との交代・交錯そして、失認……64歳、下天を想い『敦盛』を舞う……